

父に、乗り遅れたこと、歩いて山越えすることを告げ、片手分の荷物に作りかえました。三歳の娘をおんぶし、目の見えない父の手を引くためには、ほんの少ししか持てません。指輪、時計を身につけ、袋には食糧・衣類を入れました。そして牡丹江の方角の山をめざして歩き始めたのです。

途中、日本守備隊の兵士に合いました。「日本は見込みない。ソ連が押し寄せて来る」と言い、手榴弾しりゅうだんを五個くれました。自決用だったのです。

山の中にさしかかったとき、満人のグループに囲まれました。そして、身につけていたもの、荷物の全てを略奪りゃくだつし、そのうえ着ているものまで脱がそうとします。

私は満語まんごを話すことが出来たので「荷物はやる。着ている物までとるとは人間のすることか」と言いますと、私の語氣に驚いてか脱がすのを止め、通してくれました。

私共三人は、それから着のみ着のまま、食糧もなく、飲まず食わず、野宿を重ね四日かけてやっと八月十二日牡丹江に着きヤマトホテルに落ち着くことができました。そして、次の日のことです。ホテルのスピーカーが

「奉天に向けて避難列車が出る。動ける者だけ乗る」と告げました。私は迷いました。父が「俺はいい。早く行け」と言いましたので娘をおんぶし列車へと向かいました。そして、貨車に乗ろうとしたときです。

他の人は貨車の側壁にしがみつき、乗り越えているのに私はどうしても足が上がりません。二・三回まで足を上げようとしたのは覚えていますが、その後はボートになってしまいい気付いたのは、ホテルのドアの前でした。ドアが開いて父が「帰って来てくれたのか」と言った涙顔は今でも忘れることができません。

「夜九時に次の避難列車が出る」というので、今度は三人連れで出かけました。『目の見えない父を置き去りなんて絶対できない』と私は決心したのです。私は他の人から父が「体が不自由だから、乗るな」と言われないよう、父の後から強く押し、無蓋貨車むがいに乗せました。いつときして、アナウンスがあり「前の列車が襲撃され全滅したので、出発が遅れる」とのこと。これを聞いて私は父に「じいちゃん!! ありがとう」と抱きつき涙が止まりませんでした。一番列車に乗る時、私の足が上から

なかったのは、父がホテルから念じてくれ、私共を呼び寄せ列車に乗せず、嫁と孫の命を救ってくれたのです。

途中、先の列車が襲撃されたところで止まったとき、娘が「お母さん、おにぎり」どうったえました。食糧がなくなっていたときのこと、私は意を決して貨車から闇にまぎれてそっと降り側の畑に這って行き、キュウリを二本もぎとることができ父と娘に食べさせました。

また、奉天に着いた八月十四日も、現金はなく、知人もなく食べる物はありません。そこで私は満人の家に行き、「味噌と塩をください」と頼みました。満人はかわいそうと思ったのでしょう。半握りの塩をくれました。私はそのちり捨て場で集めたジャガイモの皮を空き缶に入れ塩でまぶし三人で食べ飢えをしのぎました。

翌八月十五日（まだ終戦は知りません）奉天の室町小学校に避難し、そこで掖河の人々と再会し、皆私共三人の避難行にびっくり無事を喜んでくれました。

室町小学校には四日ほどいましたが、二日目のことです。「掖河の二村さん（旧姓）はいませんか」のアナウンス。事務所へ出て来たのは夫でした。夫は奉天の司令

部にいたのです。私は度重なる幸運に泣きました。

夫は、父を見るなり「父も連れて来てくれたのか」と私の手を固く握ってくれました。私は父の手を引いて逃げて来て良かったと思います、苦勞がふきとびました。

夫の世話で、司令部から掖河の人々に毛布・食料品が支給され、やっと人心地つき感謝されました。しかし、夫は数回の面会の後、シベリアへ旅立ち、抑留に入りとうとう帰ってきませんでした。

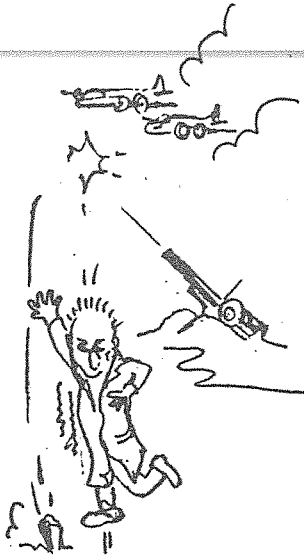
私は奉天駅前の日赤病院で看護婦として働き、三人の生活に入りました。昭和二十年十二月、父は衰弱のため私にみとられ病死し遂に親子二人となり、昭和二十一年五月引揚船啓福丸で博多に上陸、やっと私共の引揚げは終わったのです。

終戦前後

羽根田 三 嶋 敏

終戦の頃、私の住んでいた所は、韓国の釜山で、当時人口二十四万、当時の京城（現在のソウル）に次いで二番目の都市でした。現在、釜山の人口は三百万人を突破しているそうでその発展ぶりにただただ驚いています。

釜山の駅から南西に約六キロメートル、岩南半島の先端に位置した風光明眉^{めいび}の地で、ここに朝鮮総督府家畜衛生研究所といういかめしい名の役所が、私の勤めていた所でした。



敗戦の色濃くなった昭和二十年、この研究所は忠清北道に疎開することになり、暑さの酷しい中、毎日疎開の作業に追われていました。

食糧難は何処も同じく酷^きいものでしたので書くのをやめます。

直接、空襲・爆撃もありましたが、恐ろしいのはむしろ高射砲弾破片の落下でした。肩先をかすめて、足元の地中深く突っ込んだときは生きた気持ちはありませんでした。艦載機による船舶の爆撃はしつように繰り返されました。終戦も迫ったある夜、B 29 による機雷の投下が行われましたが、私はそのとき京城に出張中で知りませんでした。総督府に行ったところ、釜山は昨夜大空襲があったと皆がさわいでいました。実はこの機雷投下のことでした。釜山に帰ってみましたら、陸上といわず海中といわず落とされていました。そして、前触れもなく海中で爆発して水柱を立てていました。そして大きな魚が、白い腹を上にして浮かんでいました。

ついに、八月十五日終戦の日がきました。

正午に、陛下のお言葉があるというので皆ラジオに聴



き入りましたが、ところどころしか聞き取れませんでした。

いずれにせよ、終戦の詔勅で戦争は終わりました。皆脱力してしまい呆然^{ぼうぜん}として仕事も手につかず、しゃべらなくなりました。

疎開する必要もなくなり後片付け作業です。なんともやるせない気持ちでした。

この疎開片付けの仕事も概略落ち着いた頃、今度は日本への帰国ということになり、特別の事情のない限り、できるだけ早く引き揚げるようにということになりました。

た。引き揚げの船が準備されているわけではなく、ヤミの船を頼んで帰る人もかなり出てきました。私もその船を見にいきましたが、あまりにも小さな船でこんな貧弱な船に託して家族を先に帰国させる気になれず、時機の到来するのを待つことにしました。

占領軍司令官として、韓国にはリッジウェイ中将が進駐し、研究所には専門の技術将校が派遣されることになり挨拶にきました。

将来、全面的に韓国の人達がこの仕事を引き継いでやられるわけですが、当分の間、日本人技術者が所長以下十名残ることとなり、引継ぎの仕事が進められていきました。

久し振りの日曜日に、町に出掛けてみました。どこにこんなに多くの物資があったのだろうと感心しましたが、物価の高いのには更に驚きでした。

待望の引揚船は、九月二十一日ついに就航しました。

この研究所に勤めていた人達も、次々と日本に帰り各大学・研究所その他に勤めるようになりました。

なかでも、ウィールス部長だった中村稔治博士は、同

志と共に東京都立川市に日本生物学研究所を創立し、後青梅市に移転しました。ここには毎年外国から留学にきています。

細菌部長から最後の所長となられた越智勇一博士は、引揚げ後東京大学農学部長・日本学術会議会長を経て、麻布獣医科大学学長となり、同学の内容充実と日本の獣医学の改革に努力し、遂に医師課程とならぶことになりました。

釜山の研究所は、昔から世界的な流行を繰り返し最も恐れられていた牛疫の防遏^{ぼうあつ}を目的として、古く日韓合併が行われた明治四十三年農商務省牛疫血清製造所という名称で日本政府が現在の場所に設置したもので、その後、朝鮮総監府に移管せられ、昭和十七年現在の名称に改められました。

牛疫の研究については世界的權威で、今日世界中から牛疫がその姿を消したのはその功績と申せましょう。

戦争中モンゴルにて

北平原中島 井上 橘子

昭和五年、私の主人（龍雄）は、国学院大学卒業後、奈良県春日神社を振り出しに、大分県など転々として、別格官幣大社談山神社禰^ね宜^いの時、外地に日本神道を広めるという主旨のもとに、中華民國の張家口に出自を命ぜられ、家族と共に、昭和十六年七月に張家口につきました。一年後に蒙古^{もうこ}（モンゴル）神社を御造営する事になりました。神社は万里の長城の下にあり、その周辺には羊の群が白く点々としており、羊が、草を食べながら移動する、その光景は実に雄大なものでした。

張家口は砂漠^{さぼく}の土地で、ラクダが朝早くから十頭位ずつ移動しておりました。先頭のラクダには、首に大きな鈴がかけてあり、チリン・チリンと物静かに一列に歩き、後方に現地人の持主であろう人がついていました。誠にのどかな光景で子供達も、めずらしいそうに見ていました。

町では、現地人が荷車に水桶^{みづかき}を積んでスイマイマイ

（水はいりませんか）と、朝は家の前でピーサイマイマイ（マキはいりませんか）と大きな声をだしながら商売をしており、私達はそのマキを買って、石炭のたきつけにしていました。何しろ一年に三日位しか雨がふりません。私達は水をニイスイナライ（あなた、おはよう）と呼んで買っていました。

買った水を入れる容器は粗末な缶かん々でした。この缶々を二つ用意して、両肩に、かついで家の中へ運んでいました。

謝々（シェーシェー）と言葉をかけると、金をとって帰っていきます。

日本でのお手伝いさんの事をモンゴルでは、アマ（天足）といいました。

天足とは、女の子が生まれるとすぐに、指を足の腹に曲げてしまうので、大きくなるにつれ三角の足になり、ヨチヨチとしか歩けず、嫁に行っても逃げない為に、そうしていたようです。しかし、今はその様な事はないようです。

四月になりますと、黄塵（黄砂）といって、見る見る

うちに暗くなり、ローソクをつけて歩くのが一ヵ月位続きました。

昭和十七年頃だったと思いますが、モンゴルで、空陸合同演習がありまして、北白川宮殿下が川のほとりで御覧になっておられた時飛行機が滑走してきて、殿下は不慮りの戦死をとげられました。

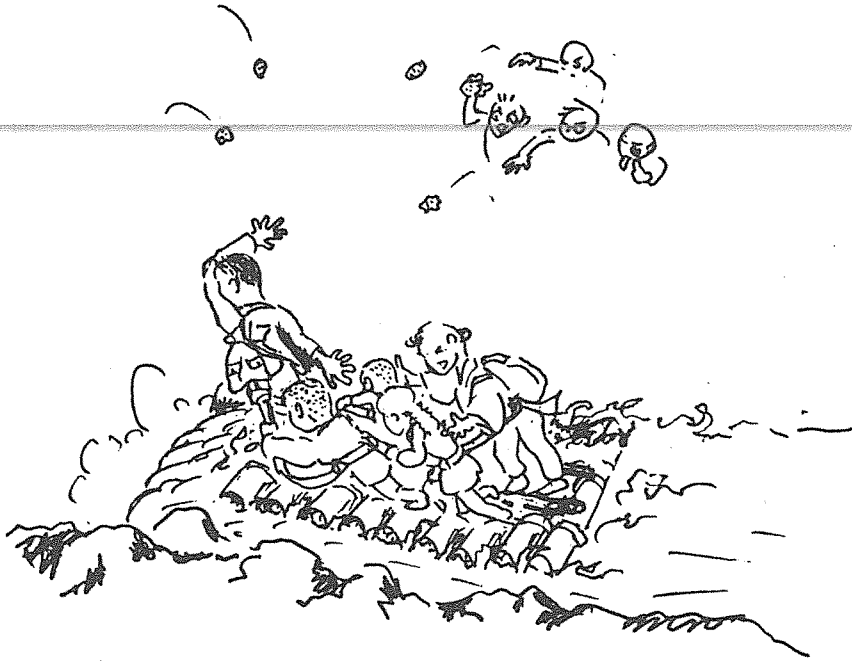
その時、私の主人は宮司でしたので、北白川宮殿下を清め一週間位おつきあいをさせていただきました。

宮殿下は宮家に護送になりましたが、くわしい事は戦時中のことであり、明らかにされませんでした。

後で北白川宮家よりお招きをいただき、妃殿下から御苦労だったでしょうとのお言葉をいただいた時有り難いと思ったそうです。

この時宮家より御神体をいただき張家口に帰りました。駅に徳王（モンゴルの王様）をはじめ日本居留民団の人や政府の皆様方のお出迎えを受け大変でした。

現地人からは、ミヨサン（神様）ミヨサントイ（奥様）と呼ばれ尊敬されました。



御神体は、モンゴル神社に納められました。

その後一年位たったでしょうか、ソ連が万里の長城を越えて攻めてきまして、張家口は焼野が原となってしまいました。

私達は、一番後の汽車で北京に引揚げました。その時天皇陛下の終戦の詔書が、ラジオで放送されました。

その時を境に私達は敗戦国民となり、韓国の人からは日本人男子の外出は生意気だとののしられ、又、女子供は、拉致されるという状況でした。そればかりではなく、家の中へ勝手に入り込み手当り次第に何でも盗んで行きました。

これは中国人も同じで、大きな物まで勝手に持って行き、私達は何とも言えない敗戦国民のみじめさをありありと感じさせられました。

帰国に際しては、検門所で検査を受ける訳ですが、特に持物は制限されました。

この検門所で皆が殺到する為、親子など離ればなれになったのでこの時の子供達が残留孤児になったと思います。

私達は主人の腰にサラシ布を巻きつけ、三人の子供をつないでLS艇に乗りました。

山口県の仙崎に上陸しました時の嬉しさはたえようがありませんでした。

引揚げ後は同じですが、何とか子供も成長しまして、主人は昭和四十七年に舞鶴神社に十四年務めましたが病気となり辞職する事となりました。

軌道に乗った時だけに残念であり、私は可哀想だと思いました。

終戦く翌年三月までの思出

蕨江 手塚 貞夫

当時（昭和二十年八月十五日終戦）私は宜蘭市郡の畜産係長として勤務していた。

係職員は市担当八名、郡担当四名計十二名、内日本人三名その内獣医一名台湾人九名内獣医一名で一般畜産行政を行っていた。内容は1.防疫 2.養豚の増改良 3.馬事の普及、これについては馬十頭を飼育し一般人の乗馬の奨励に当たっていた。

獣医二名は自分と台湾人の「林」氏であった。それに警察業務である屠殺場における豚その他の指導管理をも兼ねていた。八月半ばに入り林獣医が出勤せず問合せたところ行方不明とのこと、それ以来早朝（五時）から自分一人で生体生肉の検査することになった。彼は戦時中の不当な取扱いの復讐を恐れたのだろう。

そんなごたごたの中、員林庄（村）に駐留していた輜重隊から馬二十頭を移管された。そこで従来十頭の厩舎に入れられず放馬したら近くの農家の野菜畑を

荒らしてしまった。そこで荒らされた農家の人達が押しかけてきて「この始末をどうしてくれるのか」との申入れがあり、みんなと話し合った。



△この荒らされた畑それに野菜等どうしてくれるのか。
○君達の言分はよくわかるがただどうしてくれるのかでは私としては答えようがない。

△では、どうしろというのか。

○君達自身で荒らされた畑と現在まで育てた野菜等よくしらべて、どれだけの金がかかっているのか明後日まで自分の処にしよう。

△では明後日調べた損害金を支払ってくれるのだな。

○現在のところ君達も知っているように、日本は、戦争に敗けたので自分の手許には金がないがどうかして君達の要求通り支払う考えだ。

△では損害額を払ってくれるのだな。

△その時金がないではすまされないからね。

○とにかく君達の損害額がはっきりした上でだ。さき程言ったように明後日まで申し出るよう。

△出来ない時は獣医もそれだけの覚悟があるのだな。

○覚悟しているから君達と話し合っているのだ。

△では明後日又くるからね。

そして私はこのことを市長・課長に報告し指示を仰ぐ

べきと思いそれ等の事情を報告した。が「日本政府としての行政行事は八月十五日において終業し中国政府からは八月十五日に現状のまま管理する旨、言われている。そのようなことは、君自身で判断すべきだ」とのこと。

今まで鷹揚^{おうちよう}に事を処していた上司とも思えない言葉に一末のはかなさを覚え、「何をか言わん。すべて自身身で処理してゆくよりほかなし」といつそう身のひきしまる思いがした。そのうち日本人二名はそれぞれ親元の台北市、台中市へと行き、頼りの台湾人三名も仕事から遠ざかったので残り四名の者と相談し屠殺業者を呼んで馬二十頭の処理を頼んだ。「一頭一〇〇円ではどうか」とのことで、現金二〇〇〇円を調達してもらうことにした。

被害農家の人々はそれぞれ賠償^{ばいしょう}金額を持ち寄って来たが、六名分の合計が一、五〇〇円となったので馬を売却した金を当て、それでも余裕があるのでほっとした。

「それぞれ損害の金額を現金で渡すので領収証を出すように」と伝えた。この事件は屠殺業者の協力で結末がついた。自分としては命がけの賭であったが皆の協力を得

て解決した。残り五〇〇円は職員四名に分け与えた。

また四名の職員に「残り十頭の馬も早急に処分したい。また厩舎と放牧地（約四百坪余）も処理するから君達で元の地主を調査するよう」と指示した。

ともかく一件が穏やかにすみほっとした。そこで一人身であるから夜長のうさばらしにいつもゆく屋台でほっとした思いで呑んだ。

親父^{おやじ}から

「今夜の酒はどうか」と聞かれ

「命が助かったのでほんとうにうまい酒だ」

「そうだろうね。外の人間であつたら業者も助けずなくり殺されたかも」

「ほんとうだ。親父の言う通りだ」

「獣医先生がいつも台湾人と日本人の区別なくつきあいをやっていたから業者も助けてくれたのだよね」

と屋台の親父の話。つくづく骨身にしみる思いであった。

一方官吏・日本人はどうであつたらうか。先にいった通り翌年の三月までの給料を一括支給されたので当分の生活には支障ないが家族もちの人達はいつ内地に帰れる

のか、それまでの生活を考えると本当に心細い限りであつた。

巷間道路側で家財道具を必死に売却している邦人が軒並に続いている有様、本当に終戦を境に邦人と本島人の生活環境が逆転したのであつた。それらの人達を見るにしのびず遠くから家族に幸あれと祈るのみであつた。

そうこうするうち師走^{しよす}に入り一層街中は爆竹の音、大声で商売する者、そうぞうしく正月の近づきを感じる街並であつた。

先に依頼し調査していた厩舎周辺の元の地主も判明（四名であつたと思う）したので「皆で話し合つて円満に解決するよう」申したところ皆大喜んでくれた。

その後、四名の職員と業者地主等が訪ねて来た。「皆で相談したのだが失礼と思うけれども先生も懷中がとぼしいと考える。餞別として心ばかりではあるが納めてほしい」とのこと、ほんとうに有り難いと思ひ受けとることにした。これで金にもゆとりが出来心強さを覚えた。

三月二十八日だつたと思う。「四月四日午後五時まで宣蘭駅に集合のこと」と指令がきた。

「ああいよいよ一週間程で此の地を離れるのか」当地に転勤を命ぜられたのが昭和十八年七月それから二年余り、昭和十一年十一月初住地が隣接の羅東郡^{らとうぐん}であつた。思ひ出深い地である。

引揚準備としても一人身であるから柳こうりに、洋服三着、コート一、和服四着、毛布三反、次にリュックに下着、必需品を入れ後は念のため食パン・カンパン・砂糖少々これで準備完了、後は四月四日を待つのみであつた。

心のゆとりも出来たので、屋台の親父との別れのため呑みにいった。

「親父呑みにきたよ。今夜が最後だ。元気でな」

「獣医さんよくきたね」

「別れのため呑みにきたのだ。ほんとうに世話になったな元気でな」

「ああ先生もね」

さらば宣蘭よ。人間のほんとうの心ははかりしれない。若さ二十七才の血はおどり、いつの日にか又面会の日は――。

思いはすでに年老いた両親の顔。親せきの人達。いかに戦後の荒廃した日本で過ごしているのだろうか。心は早や、故郷高鍋へと。

戦中戦後外地にいて

川田 財津 モトエ

昭和十三年頃から東京で洋裁の勉強しておりました。戦争がだんだん激しくなり、何か自分で出来る事をしなくてはと思い淀橋区の神田川沿に小さな洋裁学院を始めました。ちょうどその頃アメリカのB29の第一回東京空襲がありました。「ああこれは東京にいては危い」と心配していました時に、満鉄に勤めている弟から「早く大連に来る様に」と勧められ早速渡満しました。外国では県人会に届出するのですがその時の会長が前町長財津三男氏でした。

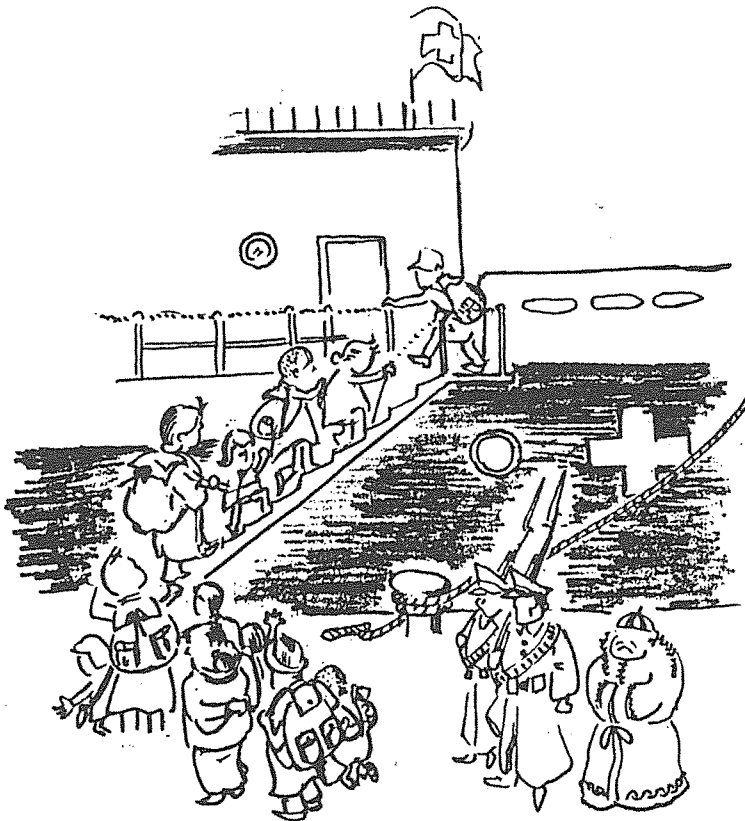
大連市の社会館を訪ねました。ここには洋裁、和裁の教室が有り授産場や図書館等いろいろありました。館長は「今貴女あなたのような人が必要な時だ」と申され早速拔芸講師として採用して戴きました。

内地での空襲は日増しに激しくなり、ついに敗戦となり大連にもソ連兵が（男子、女子）進駐して来ましてものすごく治安が悪くなりました。でもお陰様で大連市で

は一度も戦場には成りませんでしたでしたが総ての社会秩序はくずれ、敗戦国民はあわれなものでした。昼間でも女性の一人歩き等はこわくて出来ませんでした。

でも「引揚げまでは何とか頑張らなくては」と思いました。幸いにその時日本人の和服は立体裁断なので和洋どちらにも裁替が出来るので助かり、それから男も女も毎日毎日自分達の衣類等、肩に掛けて浪花町ななわまちという大連一番の繁華街（青空市場）に売りに出かけこれが毎日の仕事になりました。

その内に引揚げが始まり、一番先に老人や子供、一人暮らしの順に帰国しました。めぼしい者は全部接収せつしゅうされ、帰る時はリュックサック一個、現金千円持って私は大連港から佐世保港に着き、昭和二十二年三月二日日本の父母のもとに帰りました。



満州引揚

下屋敷 上野正英

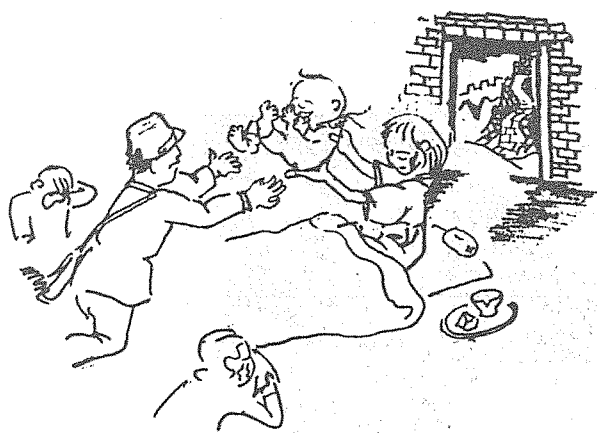
私達（家内と子供一人）が満州から引揚げたのは昭和二十一年九月のことだった。くらみえに夕方汽車が高鍋駅に着くには着いたが、駅舎のぐるりを見ると、戦災の跡がありありと見える。高鍋は私の郷里ではあったが、一家を挙げて満州に行っていたので、郷里とは言え、住むにあてどはなかった。しかし、母の里方が中鶴にあったのでそこをたずねて見て、生活出来そうになれば、家内の里である和歌山に行くほか仕方がないと思い、中鶴の方面の状況を駅員に尋ねた。「さあ、行って見ないとわからない、殆んどの家が空襲や、枕崎台風のときに倒れているので、家があるといいますがね。」という話とに角行ってみることにした。しかし、もしもの時のことを考えて家内と子供は駅舎に残しておいた。

中鶴の母の家は無事だった。それから今日まで四十余年の高鍋生活が始まるわけだが、母の里方も叔父一家が大分から引揚げていたので、一・二日いて姉の家に身を

寄せた。

まず始めなければならないのは、子供の身の振り方であった。子供というのは大体次のような理由で引揚げの途中から連れて帰った孤児だった。

引揚げの途中私達は錦州の収容所に入れられたが、引揚げを容易にするために中隊制度をとっていた。私はその中の小隊の世話をさせられていたが、私の小隊の中に



乳飲み子をかかえた一人の母親がいた。しかし明後日には船に乗るときになって、その母親はアミーバー赤痢にかかって死んでしまった。残された子供がこの子である。

私は小隊長という責任を感じて、とに角連れて帰ることにした。おしめのいる子供のことで、皆に呼びかけたら、たくさんのおしめが寄附されたのを忘れることが出来ない。

この子供の母は佐賀県、父は新潟県の人であったが、くわしいことは判っていなかったので、県庁に問い合わせのはがきを出した。係の人が余程手を回して下さったのだろう、まず佐賀から、おじいさんがみえた。僅か一ヵ月余りの吾が子だったが、別れるとなるとやはり淋しい「一晩位泊って行ったら」とすすめたが「皆が待っているの」といってその晩のうちに子供をつれて帰られた。

新潟にも連絡していたので、「ひょっとすると、新潟からも来られるかも知れない」と心配だった。

結局、「先に佐賀に行っているかも知れない」と新潟

の叔父さんは佐賀に寄り、「お世話になった」と、高鍋までわざわざあいさつに来て下さった。子供は新潟に連れて帰るとのことだったが、折角孫が来たと喜ばれた佐賀のおじいさん達の落胆ぶりが目にみえるようだった。

（新潟のお父さんになる人はシベリヤに抑留されていたが、数年たって無事帰られた。）

あの混とした世の中で、孤児をみんなの協力のお蔭で連れて帰り、無事に身内の方にお渡しできたことは一生忘れられない思い出である。

第六部 戦中・戦後の内地

戦中・戦後の米づくり

竹鳩^{たけく} 原 重 隆

世界第二次大戦は日毎に激しくなり、戦争の範囲は拡大され、国家総動員、食糧の安定確保と流通を図るため米をはじめ麦・雑穀・甘藷まで総供出時代になった。

国民は、徴兵、動員に駆り出されるのは勿論、内にあつては食糧増産に全力を尽くしたが、購入する肥料は全くなく、刈り草を集めては堆肥^{たいひ}を作る状態であつた。当時は殆どの農家が、牛、馬を飼育し、牛馬の糞尿^{ふんにょう}が唯一の貴重な肥料源であつた。

労働力は家庭の主婦と老人であり、農家の主婦は牛馬による田畑の耕作から、一切の農作業に従事して食糧増産・供出に励んだ。

当時は供出米の割当数量が多く、生産された米を供出して配給米を受けて生活をせねばならない農家が多かつた。また、高齢者の家庭や、病気の家庭等で脱穀作業が

できないときは、地域の人々の奉仕により供出作業に協力し割当数量の完納に努めたものだった。

終戦後、昭和二十年八月二十六日であつた。毎年その頃には宮崎県には台風が襲来したものであるが、この時はものすごいもので、予報も全くない時代、不意の台風であつた。

この台風によって竹鳩の住家の六割以上が倒壊した。また終戦直後のことであり竹鳩公民館には残務整理のため、旧軍の一個小隊が配属され宿泊していたが、公民館が倒壊の際に逃げ遅れた一名が死亡、数名が負傷するという程の激しい台風であつた。

九月十六・十七日にも再び台風が襲来し、今度は前の台風とは反対向きの風で、半倒れの家も完全に倒れる始末で、竹鳩六十五戸の中でどうにか形が残った家は十七戸しかないというみじめな有様であつた。

大事に育てた稲は一面白穂と化して壊滅的な打撃を受け、農家でも自給できず配給を受けねばならない実情となった。その後、来る年も来る年も猛烈な台風が吹き荒れて、台風銀座と呼ばれるまでになり、水稻をはじめ各

種の作物は不作続きで、食糧事情は困難を極めた。



二十一・二年頃が特にひどく、供出を拒む農家には強権発動といって警察官・役場職員・食糧事務所の検査官・農協職員・農事組合長等の立会いで農家の倉庫等に立入検査して一定の保有量を残して供出させるという措置をとっていた。

また、二十五年二月宮越古寿町長時代には高鍋町の供出成績が悪いので、町職員をはじめ関係者が供出督励で出廻り、夜間に役場のサイレンを吹き鳴らし出荷協力を呼びかけたが、これが問題となったことは今でも忘れられない思い出の一つである。

その後、台風災害を防ぐという発想が導入され、早期水稻栽培が今日に及んでいる。

終戦直後

蚊口西一 日高 マサエ

私は、戦後昭和二十一年四月台湾台中市から引揚者として蚊口の実家へ帰って参りました。

台中市は、たいした空襲にも合わず、ただ田舎にあった日本軍の飛行場へは激しい爆撃があったようでした。

私達は戦後の混乱もなくアメリカの貨物船で、一人千円札一枚ずつもらい大竹港に上陸いたしました。

高鍋駅に着いたら、駅は爆撃にあい小さい小屋がポツンと建っていました。蚊口がこんなに荒らされていたようとは夢にも思っていませんでした。

次々に耳にする恐ろしい話にびっくりするばかりでした。また、台風も私の帰る前の年でしたが激しかったようで、空襲でやられ、それに台風が加わってどこの家も傷みがひどかったようでした。

私の実家は当時、母・兄夫婦に私の妹弟、それに兄の子供達と大勢の家族で、義姉もさぞ苦労したことと察します。

何もかも配給で、ご飯はじゃがいもをさいの目に切って片栗粉かたくりこの入ったものでした。野菜から米魚まで統制され不自由な生活でした。



私は昭和二十四年結婚しましたが、主人は人に使われるのが嫌いでやみ商売ばかりしておりました。門川へいわし買いに行つては、みな駅で警察に取られるので、高鍋駅近くの踏切付近で列車から落とし、あとでそれを拾いに行くという有様でした。いわしを買って駅に降りるとき、前の人達が派出所へ連れて行かれるのを見てそのすきに家へ逃げ帰ったこともありましたが。後をつけられている思いでこわくてたまりませんでした。自分の金で買った物を、まるで他人から泥棒でもしているような、切ない思いでした。今考えると馬鹿げたように思います。主人はヤミ米を田舎へ買出しに行き、それを延岡方面へ売りに行っていました。これを『かつぎ屋』と呼んでいましたが、主人は日に二度三度と警察の目くぐつては商売に行き、生活のためがんばってくれました。

蚊口の浜では当時塩炊^{しおた}きがまるで店を並べたように賑^{にぎわ}っていましたが、塩は高く売れるので一斗^{いど}（十八リットル）ぐらい持っては西都方面まで行きました。ここでもバスの中まで警察の目が光り、塩が全部売れて帰るときはほつとしたものでした。

『かつぎ屋』のやみ商売の次は回転焼のせんべい作りでした。当時はまだ砂糖はなく、ミッゲン・ズルチンを使い『クラッカせんべい』として売りましたがこの仕事も長続きしませんでした。

世の中が落ちつくまでいろいろと仕事をし、生活をして私の現在があります。よくがんばれたと思います。

枕崎台風

羽根田 三嶋 敏

終戦の年昭和二十年は八月と九月それぞれ一回宛二回激しい台風の襲来がありました。米軍の爆撃を受けて全国焼土と化した無惨な姿の日本、そこに追撃をかけるように九州は今度は手痛い天災の試練を受けねばなりませんでした。激しかったとはいえ八月の台風は、まだ息の根を止めるほどのことはありませんでした。

しかし月かわって九月は、台風の季節でもあります。その十七日は忘れようとしても忘れることのできない激しい台風の見舞を受けた月でした。古今未曾有^{ここんみぞう}といっても決して言い過ぎではなく、ほんとうに息の根が止まるほど激しいものでした。

この台風は枕崎台風と名付けられました。この頃の台風は上陸した場所の地名をつけて伊勢湾台風、室戸台風などと呼ばれていました。

九月十七日は朝から風が吹きはじめました。時間の経過と共に風雨はだんだん激しくなってきました。夜にな

るとその音も無気味な唸り声をたて、雨戸に叩きつけます。

